

卒業論文の要旨

論文題目	感情と理性—ジェイン・オースティンの美德： 『高慢と偏見』(1813)、『エマ』(1815)、『説得』(1817)の分析を通じて
氏名	岡田佳菜子
メジャー	英語学・英文学
(要旨)	
<p>感情と理性は、我々の判断や行動を導く重要な心の働きである。19世紀イギリスの日常を忠実に描いたジェイン・オースティンの作品では、これらの二つの力が物語の展開や主題を示す上での鍵となる役割をはたしている。彼女の作品において、感情と理性の相対的な価値や優劣は固定したものではない。したがって、読者の中には、彼女の作品から感情をあらわにして素直であることの価値を読み取る人もいれば、常に理性的であることを高く評価する姿勢を読み取る人もいだろう。本論では、1813年から1818年にかけて発表されたオースティンの三作品、『高慢と偏見』(1813)、『エマ』(1815)、『説得』(1817)の分析を通じて、オースティンが道徳的に正しい判断を導くものとして支持したのは、感情と理性それぞれのどのような働きであったのかを考察する。</p> <p>多くの物事に正と負の両面が存在するように、感情と理性にもそれぞれの正と負の働きがある。感情と理性の狭間で揺れ動く様々な人物を描き出すオースティンは、そのことを熟知しているかのように、二つの力のどちらか一方に傾かない姿勢を示している。そこで重視されているのは登場人物の感情と理性のバランスである。このようなバランスの重要性は、オースティンの複数の作品における「プライド」の描き方にも通底している。「プライド」が「高慢」と「自尊心」という似て非なるものになるのは、背後に働く感情と理性のバランスが大きな影響を与えているためなのだ。</p> <p>オースティンは、財産や地位によって人間を判断することが一般的であった時代に、生まれながらにしてある程度の自負を持つジェントリー階級とその周りを取り巻く人々を描くことで、社会に対する疑問や彼女の評価する人物像を浮かび上がらせた。感情と理性、そして高慢と自尊心の間で揺れるヒロインたちを通して、人間として本質的に重要なことは何かを提示したのだ。</p>	
(指導教員の推薦のコメント)	
<p>感情と理性を軸に据えることで、オースティン作品における様々な登場人物の行動と心理の背後に見え隠れする作者の一貫したメッセージや価値基準を浮かび上がらせることが出来た。主要な三作品を丁寧に読み込み、それぞれの作品の主題を的確に理解した上で、それらを横断的に参照しながら、作家の一貫した姿勢や価値観について議論を展開している点を高く評価したい。また、登場人物や人間一般の心理に対する鋭い洞察が随所に光っている。様々な参考文献にあたって作品に対する理解を深めた上で、借り物ではない自分自身の考察にもとづいた議論を丁寧に積み重ねた労作である。</p>	